

乳歯外傷の長期経過観察の1例

○森川和政, 今村 均, 牧 憲司
(九歯大・歯・小児歯)

【目的】

乳幼児は、歩行の不安定や危険に対する注意不足、回避の遅れなど行動に多くの未熟さを持っている。そのため日常生活の中で、事故により口腔領域に外傷を受け、小児歯科医院に来院することが少なくない。今回、我々は乳歯外傷の長期経過例について報告する。

【症例】

患児：3歳2か月 男児

初診日：平成20年4月28日（5年経過）

主訴：上顎前歯部の打撲による痛み

現病歴：初診時前日、自宅のテーブルで顔を強打し口腔内から出血が認められたが、しばらくすると止血を確認できたため様子を見ていた。翌日になって患児が痛みを訴えたため当科を受診した。

診断：上顎両側乳中切歯の亜脱臼、振盪、および上下顎前歯部歯肉、下唇裂傷

治療経過：外傷歯治療ガイドラインに沿い、固定は必要ないと判断し経過観察とした。受傷1か月後に上顎左側乳中切歯の歯冠の変色が認められ、受傷9か月後には、歯髓腔の閉塞が認められた。また、後継永久歯には若干の転位およびエナメル質減形成を認めた。

【考察】

乳歯の外傷の場合、受傷歯の歯根によって、後継永久歯胚が傷害されることが少なくない。後継永久歯胚への影響は歯胚が幼若であればあるほど大きくなると考えられており、特に、3歳以下の外傷受傷歯では、後継永久歯のエナメル質減形成、彎曲歯、歯根形成の停止、嚢胞の形成、萌出障害などを発現する可能性が高くなるといわれている。そのため、外傷歯の後継永久歯が萌出するまで、経過観察が必要となる。また、受傷歯は受傷後、歯冠の変色、歯髓の石灰化、歯髓の内部吸収、歯根吸収などが見られることがあるため定期的な経過観察が必要である。

骨膜炎を惹起した幼若永久歯にMTAを用いてrevascularization treatmentを施行した1例

○佐伯 桂, 塩野 康裕, 杉山 絢子, 牧 憲司

(九歯大・小児歯)

【目的】

近年、幼若永久歯の根尖性歯周炎にアペキシゲネーシスを適用し非侵襲的な処置を行う傾向がみられる。これはrevascularization treatmentと呼ばれる。また、Mineral trioxide aggregate(MTA)は、優れた辺縁封鎖性と生体親和性および硬組織誘導能を有することが報告されているセメントである。

本症例では、9歳女児の中心結節破折により骨膜炎を惹起した・にMTAを適用し、revascularizationに成功したので報告する。

【症例】

患児は9歳の女児。下顎右側臼歯部の自発痛を主訴に来院した。前日より自発痛が出現し、摂食不可能となったという。・に中心結節の破折および歯肉腫脹が認められ、動揺度は2度、顔貌は非対称であった。右側下顎骨骨膜炎の診断にて九州歯科大学附属病院口腔外科において入院下で抗生剤点滴を行った。6日後退院し当科を受診した。・急性化膿性根尖性歯周炎の診断で感染根管処置を行う予定であったがファイルによる知覚反応を認めたため、revascularizationを期待して化学的清掃のみを行い、MTAを充填し、仮封を行った。3か月後に咬合痛が認められたため、さらに低位で断髄し、再度MTAを充填した。術後の経過は良好で、デンタルエックス線写真では5か月後に歯根の伸長、10か月後に被蓋硬組織(dentin bridge)と根尖閉鎖が認められた。

【考察】

従来、幼若永久歯の根尖性歯周炎や膿瘍併発はアペキシフィケーションを期待した処置が一般的であった。今回、骨膜炎を惹起した幼若永久歯にMTAを用いてrevascularizationに成功した。今後さらに歯根の状態を観察していく必要があると考えられるが、MTAは小児の歯内療法において有用であることが示唆された。